

## フェリチン測定における機器・試薬変更の効果

◎石橋 一裕<sup>1)</sup>、中川 雅子<sup>1)</sup>、藤井 尚貴<sup>1)</sup>、稲垣 泰良<sup>1)</sup>、石川 幸和<sup>1)</sup>、寺部 静祐<sup>1)</sup>、山本 均<sup>1)</sup>  
富山市医師会 健康管理センター<sup>1)</sup>

【はじめに】フェリチンは鉄を貯蔵する働きを持つ蛋白質であり、肝細胞や脾、骨髄など体内に広く分布している。

臨床現場においては、鉄欠乏状態を把握するために有用とされている。当センター検査部では、当初汎用自動分析装置でフェリチンの測定を行っていたが、外部精度管理調査の評価、コストにおいて課題が存在していた。今回、専用自動分析装置による検討の機会を得たので、その効果と合わせて報告する。

【検討方法】従来法を BM6070(日本電子)、LZ テスト栄研 FER(栄研化学)とし、①アーキテクト i2000SR、フェリチンアーキテクト(アボットジャパン)②HISCL800、HISCL フェリチン(シスメックス)と各々比較し、相関係数を算出した。

【対象】試料は、当センター検査部にフェリチンの依頼があった検体の残余血清を用いた。

【結果】従来法との相関性は、アボットジャパンが  $R^2=0.990$ 、シスメックスは  $R^2=0.983$  であり、いずれの

比較でも回帰直線は直線性を示した。

今回は、より普及率の高い測定方法を採用したことで、外部精度管理調査の評価改善に繋がった。また、専用自動分析装置を用いたことで、運用方法の改善につながり、コスト面では従来法を 1 とすると新法では 0.9 となり収入面では 1.8 となった。

【まとめ】測定方法(機器・試薬)の変更により、汎用自動分析装置での課題を解決することができた。本来汎用自動分析装置の試薬を検討する際は、同じ装置を用いて試薬メーカーを変更することが一般的であるが、運用方法と精度面を重視し専用自動分析装置を用いて検討を行ったことで、よりメリットの大きい方法を選択する幅が増えた。今回の経験を経て、現状に満足することなく、試薬の検討や運用方法の見直しを定期的に行う必要があると考えさせられた。

富山市医師会健康管理センター (076)422-4122